様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：２４５０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５９６

研究課題名（和文）国際家族と学校・NPOをつなぐ母語・バイリンガル教育支援―言語資源育成の視点

研究課題名（英文）Mother tongue and Bilingual education as language resource for international family, schools and NPO

研究代表者
松田　陽子（Matsuda, Yoko）

兵庫県立大学・経済学部・教授

研究者番号：８０２３９０４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は外国につながる背景を持つ国際家族の子どもたちの言語問題に着目し、母語・継承語と日本語のバイリンガル教育の学習支援について考察したものである。彼らの複言語力を「言語資源」という立場で捉え、二言語を習得していくことが、本人の学習力を助け、家族の絆を強め、将来の可能性を広げ、国境を越えて活躍するグローバル人材育成にも役立つという側面に焦点を当てている。
　学習支援の方策の提案として、iPadを使ったバイリンガルビデオレター作成による日本とベトナムの国際交流授業の実践研究を行い、学習動機を高める効果を検証した。さらに、多言語ホームページによる関係者のネットワーク作りについて考究している。

研究成果の概要（英文）：This study aims at the language issues of the children of international family, focusing on the bilingual education to maintain their mother tongue/ heritage language and Japanese to nurture them as 'language resource'. We demonstrate how the bilingual competency contributes to their personal cognitive development, wider future possibilities for their careers, stronger family bond, and their capacity to become an active global person.

An innovative teaching method, utilizing Japanese and Vietnamese bilingual video letter created with iPad, was introduced and examined. This method was proved to be effective for enhancing motivation for learning their heritage language. Also we studied how to utilize the multilingual website we created to disseminate the importance of mother tongue/ heritage language education. The study contributes to connect those who are engaged in the support of multicultural children and to strengthen the practical research for the education.

研究分野：社会言語学、日本語教育

キーワード：母語　継承語　バイリンガル教育　言語資源　教育支援　国際家族　ビデオレター

１．　研究開始当初の背景

本研究は、平成 19–21 年度に行った科研研究「外国人児童の母語学習支援をめぐるネットワーク形成の国際比較」(基盤研究 C，代表 松田陽子,19520461)、平成 22-24 年度に行った科研研究「外国人児童への母語学習支援体制の構築に関する国際比較」(基盤研究 C、代表　松田陽子，22520536）の研究成果をもとに、さらに実践的な応用研究を目指すものである。

国際家族の子どもたち（本人が海外生まれか、両親、ないしは片親が海外生まれの家族の子どもたち）の言語発達上の課題には、日本語と母語・継承語の学習問題、家族間コミュニケーション問題、アイデンティティ形成問題などがある。それらの課題について、平成 19 年度より、学校、母語教育支援 NPO の取り組み、行政の対応などについて研究してきた結果、特に、家庭と学校・NPO が連携した教育支援の重要性が浮かび上がってきた。そして、母語教育支援の現場では、多様な言語・文化能力を持つ子どもたちを教育するための教授法や、学習ツールの開発が急務であることも明確になった。また、学習モチベーションを維持していくことの難しさも大きな課題であることがわかった。

また、日本語力不足で自尊感情や学習動機を喪失している子どもたちが、母語・継承語の能力の伸張によって、自己認識が肯定的に変化し、学習能力も伸びていくことが多数観察されている。(Chumak-Horbatsch 2012，中島 2010）しかし、一般的に、学校も家庭も母語と日本語の両方を伸張させるバイリンガル教育の重要性や効果を十分に理解しておらず、日本語力の不完全さのみが問題視され、排他的な社会の中で、母語を喪失させる圧力が蔓延している。そこで、母語学習の重要性や有効性を研究者が提示することは、本人の成長のみならず、今後の多文化社会にとって、バイリンガル・バイカルチュラルな能力を持つグローバル人材を育成することにも繋がり、大きな意義のあることと考え、そのために、「言語資源」を育成するという視点が重要であると考えた。

さらに、これらの課題に取り組む研究者や現場の実践者、行政担当者のネットワークが非常に少ない現実を踏まえ、これらを有機的に結びつけることが、学習支援の推進や課題のさらなる解明に必要であると思われた。

２．　研究の目的

上述の平成 19 年度から 24 年度までの６年間の母語学習支援研究の発展的研究段階として、本研究では、国際家族の子弟を母語と日本語のバイリンガルに育てることの意義と実践的課題の考究を、言語資源の育成(中島 2010)という視点から、マイノリティ言語を対象にして行ったものである。第一に、母語・バイリンガル育成に必要な学校・家族支援の課題と、学校・NPO による連携的支援の方策を解明し、ICT を活用した教授法（Cummins & Early 2011）や教育実践の具体的な方法を構築していくこと、第二に、母語能力を心理・社会的に人を豊かにする言語資源と捉え、その有効性を考察するために、成功事例を検証すること、第三に、母語・バイリンガル学習支援のために、ウェブサイトによって情報・人的交流を促し、当事者、地域社会、研究者の連携を促進する方策の開発、に焦点を当てている。

３．　研究の方法

(1) 国際家族調査

24 年度に実施した国際家族の調査（7 言語、35 名）の結果について、再度、詳細に分析と考察を行った。さらに、25 年度に行った中国系の家族の調査（アンケート調査 53 名、インタビュー調査 5 名）について分析と考察を行った。

(2) バイリンガルビデオレター作成

Cummins & Early (2011)の Identity Text の考え方を援用したバイリンガルビデオレター作成による教育実践の手法の開発とその効果を探った。26 年度と 27 年度に、iPad を利用したビデオレター作成を兵庫県の小学校のベトナム語母語教室活動として実施し、ベトナムの小学生との交流を行い、その実践方法の研究、効果の検証を行った。

(3) 言語資源をめぐるインタビュー調査

母語・継承語について、オーストラリアやカナダで広がっている言語資源としての意義を明らかにするため（中島 2010，松田 2011)、バイリンガルとして成長している５名の大学生にインタビュー調査を行った。高校進学に向けての課題についての調査も行った。

(4) 学習動機の考察―カナダ調査より

23 年度・24 年度に実施したカナダでの調査をもとに、母語・継承語学習の動機付けを高めることについての研究と分析を行った。

(5) 韓国 NPO 調査

韓国での状況をソウルで現地調査し、母語・継承語と韓国語とのバイリンガル教育の課題に取り組むための方策について韓国の NPO の実践者等との国際連携研究を行った。（トヨタ財団の支援による「バイリンガル環境で育つ子どもたちの言語形成に考慮した教育環境整備事業―韓国との連携で広げるネットワーク構築へ」（代表　吉富志津代）との連携研究）

(6) 多言語ウェブサイト作成と活用分析

24 年度に作成した母語学習支援のためのウェブサイト（「多文化な子どもの学び―母語を育む活動から」http://education-motherlanguage.weebly.com）の一部を６言語に翻訳し、国際家族への支援の効果を考察した。さらに関係者

の情報交換、ネットワーク作りのために、そのサイトでフェイスブックを利用し、それらの活用状況を分析した。

４．　研究成果

(1) 国際家族の調査結果より

国際家族の調査については、分析の結果、母語の継承の期待が強いが、家庭内では困難であること、そして、言語力が将来の可能性を広げるということが母語継承の動機の一つとなっていることが明らかになった。（野津・乾・杉野 2014）中国系の調査では、母語学習の動機として、親や祖父母とのコミュニケーションの他、中国とのつながりを強めること（約 20%）、将来の可能性が広がることへの期待（約 28%）も大きいことがわかった。（劉　2013）さらに、インタビュー調査からは、日本語・中国語・英語の三言語の育成をめざし、日本と祖国という枠組みだけでなく、子弟が広く国際的に活躍できるよう育ってほしいという意識があることが認められた。(同上)

(2) iPad を使ったバイリンガルビデオレター作成による学習支援実践より

兵庫県の小学校のベトナム語母語教室で、iPad を使ったベトナム語と日本語のバイリンガルビデオレター作成によるベトナム小学生との交流活動実践を 2 年にわたって行い、その実践手法をまとめ、学びの効果を検証した結果、学習の動機付けや学習活動への関心の高まり、生徒間の協働、生徒と家庭の保護者間の協働が起きたことが観察され、さらに、写真撮影に協力した教師や、作品上映会に参加した保護者や地域の人たちに、ベトナム系の子どもたちについての理解が深まったことなどがアンケート調査によって明らかになった。（落合・北山・久保田・松田・加地 2015）

2 年目には、ベトナムの小学生たちが、そのビデオレターについてのフィードバックを録画したものを活用して、交流の成果を今後、分析していく予定である。

(3) 言語資源としての視点―インタビュー調査より

母語を自身の言語資源としようとしているかについて、母語を維持しながら日本語も一般学生と同等のレベルに達しているバイリンガルの大学生（中国系３名、韓国系１名、ベトナム系１名）のインタビュー調査を実施した。小・中学生時に来日した学生４名、日本生まれ１名である。日本生まれのベトナム系の学生はベトナム語力は親との日常会話に使える程度ということであったが、他の学生はある程度読み書きもできる。中国・韓国系の学生は複言語力があることが自身にとって有利であるという認識がある。すべての学生は、祖国とのつながりを強く意識しており、また、アメリカへの留学を希望したり、国際貿易の仕事などに従事したいと考えている。すなわち、国境を越えて活動することへの意識が高く、多言語力を持つことが将来のリソースとなることを認識していると考えられる。

また、上記(1)の家庭調査でも、複言語力が将来の可能性を広げるものとして認識されていることが伺われた。

(4) 学習の動機付けについて―カナダ調査より

母語・継承語学習の課題として、学習の動機付けが困難であることは、多数指摘されている。そこで、母語・継承語学習支援体制が充実し、バイリンガル育成に力を入れているカナダのオンタリオ州トロント市と周辺地域における教育実践の現地調査から、学習動機を高める仕組みを分析した。その結果、移民児童の母語・継承語を「言語資源」として育成を図るだけでなく、学校の「教育資源」としても活用していること、さらに、継承語を学ぶことが、家族や仲間との言語や文化の共有だけでなく、「多文化を称揚する学校文化に自己を統合する」という動機付けが働いていることを指摘した。すなわち、トロントでは学校や社会全体が多文化を肯定的に承認している環境にあり、さらに、国際家族と学校が連携して、教育資源を提供している。そのような環境の中で、母語・継承語の学習が地域の多文化社会への統合意識を深める手段として認知されていることが、学習の動機付けを強めるというダイナミズムがあることを明らかにし、言語を使うための「道具的動機付け」だけでなく、「統合的動機付け」の重要性を指摘した。(落合・松田 2014)

(5) 国際的連携の必要性―韓国 NPO との連携研究より

日本に先駆けて外国人労働者の受け入れに踏み切った韓国は、2008 年に多文化家族支援法を制定し、多文化家族への支援がさまざまな形で推進されている。その中での母語学習支援の状況を国際学校や NPO の活動を通して調査し、シンポジウム、ラウンドテーブルによる討論等を通じて意見交換を行った。韓国でも母語学習の重要性への認知は低く、支援体制も十分でないため、連携して、意識啓発や政策提言などを行う必要性を共有した。

(6) ウェブサイトの多言語化と Facebook による情報交流の深化

作成したウェブサイトについては、母語学習教室についての情報や、母語の重要性の認識など、国際家族にとって重要な情報を 6 言語に翻訳して掲載した。（英語・中国語・韓国朝鮮語・スペイン語・ポルトガ

ル語・ベトナム語）これらの言語サイトについて、母語学習支援の当事者たちから意見聴取を行い、サイトの有効性や、修正の必要性などを検証した。

さらに、情報交流や関係者のネットワーク作りのため、サイトを Facebook とリンクさせ、関係者の相互交流の深化を図っている。そして、これらのサイトへのアクセス状況を分析し、どの地域から、何語でのアクセスが多いか、どの頁がどの程度検索されているか、等について分析中であり、最終的な結果について、後日にまとめる予定である。海外からのアクセスもあり、国際的なニーズについても分析を行っている。

(7) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

母語・継承語の学習支援は、日本だけでなく、移民先進国のカナダ、オーストラリア、アメリカ等の国々でも、さまざまな困難があり、また、新たに、アジア諸国でも労働者の移動が多くなって、同じ課題に直面している。一方で、バイリンガル能力を十分に発揮できるような人材の育成は、本人の可能性を広げるだけでなく、国にとってもメリットが大きいと考えられるようになってきたのは、最近のことである。そのため、研究の蓄積もまだ少なく、国際的な研究協力体制が必須である。国内では、まだ移民の概念さえも明確に認められておらず、国の政策は、日本語指導への重点化のみに留まっている。近年、母語の役割も徐々に注目されるようになってきており、子どもたちの教育に直面する地方自治体では、国の指針以上に先進的に進めようとしている。愛知県や兵庫県や大阪府などでもその取り組みが少しずつ進められているが、学術的な研究や、実践的な対策がまだ非常に遅れており、社会の意識の啓蒙についても、まだ、ようやく一歩を踏み出したばかりのような状況である。（松田 2016）平成 26 年には、トヨタ財団の助成事業の一環として、「二つ以上の言語環境で暮らしている外国につながる子どもたちの教育に関する提言」を兵庫県の教育委員会や関係諸団体に提出した。このような活動や、実際の教育現場への支援、研究の蓄積の一部として、さまざまな論考の発表を行い、ウェブサイトを通じて関係者のネットワークづくりを開始したことは、たいへん意義深いと考える。

(8) 今後の展望

多文化を背景とする子どもたちは、今後も増加していき、本研究課題についての教育実践や研究はさらに必要性が高まっていくと思われる。これまでの科研の研究成果については図書として刊行する予定であり、ウェブサイトも今後、さらに充実させて、近年ニーズが増しつつあるフィリピノ語への対応も付加する計画である。また、現在の利用状況の分析に基づき、さらにインターアクティブな情報交換サイトとしての役割を果たせるような仕組みを勘案したいと考えている。この３年間の科研研究を通じて、国内外の多くの研究者や実践者とのネットワークを構築してきており、今後、この繋がりを通じて、研究の深化を図っていきたい。また、iPad を使ったビデオレター作成による母語学習支援の方法は、他の研究者からも関心をもたれており、韓国語、中国語でも実践研究を進めて、その効果を実証的に調査していく予定である。少人数の研究では限界があるので、国内外の多くの研究者、実践者と協力していくことを目指している。

【引用文献】

①Chumak-Horbatsch, Roma (2012) *Linguistically Appropriate Practice,* University of Toronto Press, 2012.

②Cummins, J. and M.Early (eds.) (2011) *Identity Text: The collaborative creation of power in multilingual school,* Sterling, USA: Trentham Books.

③松田陽子(2011)「多言語資源の開発をめざすオーストラリア―移民コミュニティ言語に関する政策をめぐって―」『商大論集』第 62 巻第 3 号,兵庫県立大学,pp.165-195.

④松田陽子(2016)「多文化共生社会のための言語教育政策に向けて―多文化児童のバイリンガル育成の視点から―」『人文論集』第 51 巻，兵庫県立大学，pp.83-109.

⑤中島和子編著（2010)「マルチリンガル教育への招待―言語資源としての外国人年少者」ひつじ書房.

⑥野津隆志・乾美紀・杉野竜美（2014）「外国にルーツを持つ家庭における母語使用の実態と課題―保護者に対する調査より」,『国際教育評論』No.11, 東京学芸大学国際教育センター，pp.34-52.

⑦落合知子・北山夏季・久保田真弓・松田陽子・加地匠（2015)「バイリンガルビデオレター作成を通じて形成される学びに関する研究―継承語学習教室でのベトナムの小学校との iPad を使った交流活動実践より」,『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会 2015 年度研究大会予稿集』，pp.53-55.

⑧落合知子・松田陽子(2014)「カナダの継承語資源育成のための教育実践に関する研究」,『人文論集』第 49 巻,兵庫県立大学，pp.101-126.

⑨劉レイナ(2013) 「在日中国人子女の母語・継承語教育政策―多文化共生社会

に向けて」兵庫県立大学経済学研究科地域公共政策修士論文.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
①松田陽子「多文化共生社会のための言語教育政策に向けて－多文化児童のバイリンガル育成の視点から－」,人文論集,査読無，第 51 巻，兵庫県立大学，2016，pp.83-109.
②野津隆志「現場生成型の異文化間教育研究の可能性－現場に根ざし変革を追求する研究とは」，異文化間研究，査読無，第 43 巻，2016，pp.80-89.
③野津隆志「NPO への参加による現場生成型研究－フィールドワークからまなざす現場との交流」，異文化間研究，査読無，第 41 巻，2015，pp.63-75.
④落合知子・松田陽子「カナダの継承語資源育成のための教育実践に関する研究」，人文論集,査読無,第 49 巻,兵庫県立大学，2014，pp.101-126.
⑤野津隆志・乾美紀・杉野竜美「外国にルーツを持つ家庭における母語使用の実態と課題－保護者に対する調査より」,国際教育評論，査読有，No.11，東京学芸大学国際教育センター，2014，pp.34-52.
⑥松田陽子 “Intermediary Power of Multilingual Radio Broadcasting in Japan and Australia”, Institute Policy Analysis and Social Innovation Working Paper，査読無，No.225，University of Hyogo，2014，pp.1-14.
⑦乾美紀 「ラオス定住難民の日本での教育経験の検証と政策提案」，難民研究ジャーナル，査読有，第 3 巻，2013，pp.70-80.

〔学会発表〕（計８件）
①落合知子・北山夏季・久保田真弓・松田陽子・加地匠「バイリンガルビデオレター作成を通じて形成される学びに関する研究－継承語学習教室でのベトナムの小学校との iPad を使った交流活動実践より」，母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究会 2015 年度研究大会,2015 年 8 月 7 日，立命館大学(京都府京都市).
②松田陽子 「移民のこどもたちの母語・継承語をめぐる言語政策－オーストラリアと日本の課題」，移民政策学会年次大会,2014 年 5 月 10 日,筑波大学(茨城県つくば市).
③落合知子「外国につながる子どもたちの学習支援について考える－学校・保護者・NPO の連携から」，神戸市人権教育研究協議会総会(招待講演)，2014 年 5 月 26 日，神戸市総合教育センター(兵庫県神戸市).
④久保田真弓・松田陽子・落合知子・北山夏季「母語・継承語教育支援のためのウェブサイト構築」，第 11 回母語・継承語・バイリンガル教育研究会年次大会，2014 年 8 月 7 日，国際基督教大学(東京都三鷹市)
⑤久保田真弓 “Effective use of technologies for dual language identity texts”, International Conference for Media in Education，2014 年 8 月 26 日，高麗大学校（韓国、ソウル市）
⑥乾美紀 “Migration and Diaspora in Asia: Diversity and Dynamics Empowring”, 2014 PNU ISSR International Conference，2014 年 9 月 21 日，釜山大学（韓国、釜山市）
⑦野津隆志 「ニューカマー児童のための支援ネットワークの研究」,異文化間教育学会第 35 回大会第 2 回公開研究会（招待講演）2014 年 3 月 2 日，京都教育大学(京都府京都市).
⑧落合知子「公立小学校における母語・継承語教育がもたらす学び」京都大学国際研究集会(真のグローバル人材育成を目指して－その理念の実践）（招待講演),2013 年 4 月 13 日,京都大学(京都府京都市）.

〔図書〕（計３件）
①西山教行・細川英雄・大木充・落合知子（他７名）『異文化間教育とは何か－グローバル人材育成のために』くろしお出版，2015，pp.209-231.
②野津隆志『タイにおける外国人児童の教育と人権－グローバル教育支援ネットワークの課題』ブックウェイ，2014，240 頁.
③井口泰・乾美紀・大岡栄美・落合知子・北山夏季・野津隆志（他５名）『未来ひょうご－すべての子どもが輝くために－高校への外国人等特別入学枠設置を求めて　調査報告書』ブックウェイ，2014，98 頁.

〔その他〕
ホームページ
①「多文化な子どもの学び－母語を育む活動から－」
http://education-motherlanguage.weebly.com

６．研究組織
(1)研究代表者

松田　陽子（MATSUDA, Yoko）
兵庫県立大学・経済学部・教授
研究者番号：80239045

(2)研究分担者
乾　美紀（INUI, Miki）
兵庫県立大学・環境人間学部・准教授
研究者番号：10379224

久保田　真弓（KUBOTA, Mayumi）
関西大学・総合情報学部・教授
研究者番号：20268329

野津　隆志（NOTSU, Takashi）
兵庫県立大学・政策科学研究所・教授
研究者番号：40218334

落合　知子（OCHIAI, Tomoko）
神戸大学・国際協力研究科・研究員
研究者番号：50624938

(3)研究協力者
吉富　志津代（YOSHITOMI, Shizuyo）
大阪大学・グローバルコミュニケーション
センター・特任准教授

北山　夏季（KITAYAMA, Natsuki）
関東国際高校・講師